

令和元年6月21日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02151

研究課題名(和文) 魏晋南北朝絵画における奥行き表現の歴史的展開 - 人物表現をてがかりに

研究課題名(英文) The historical development of depth representation in the Northern and Southern Dynasties paintings -- in the context of human representation

研究代表者

河野 道房 (Kono, Michifusa)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：90195678

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究計画を実施した結果、次のような考察が得られた。1) 北朝の畏獣の表現、特に飛来する畏獣の三角形構図や、人物群像の三角形構図は、透視図法的奥行き表現の原形となった可能性がある。2) 漢代には上遠下近の遠近法が存在したが、後漢～魏晋期には人物群や建物を台形に構成する表現が現れた。東晋～南北朝時代になると、人物群を三角形に構成して遠近を表すようになった。唐代には、遠くのを小さく、近くのを大きく描く、遠小近大の遠近法が現れ、地平線に向かって事物が短縮していく透視図法的奥行き表現が成立した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヨーロッパ絵画に較べて奥行き表現は未発達、と思われがちな東アジア絵画であるが、中国唐代には透視図法的奥行き表現が完成し、ルネサンス絵画よりも800年ほど早く、体系的奥行き表現が成立していたことを、出土遺品に依拠してその具体的展開を示すことができた。これは、二次元平面に三次元空間をどのように表現すれば自然に感じられるかという、空間認識の心理学、生理学ともかかわるであろう。また芸術的認識が成立するのは近代という見方からは、歴史学の時代区分論における「近代」の、文化における認識や定義にも資する結果ではないかと思われる。

研究成果の概要(英文)：This research resulted in the following observations：1) Triangular compositions of both flying monsters and of human groups in Northern Dynasties paintings may have been the earliest mode of expressing depth perspective in Chinese painting. 2) In the Han Dynasty, perspective was attempted by depicting the background in the upper part of the composition, and foreground in the lower part, but in the latter half of the Han period, groups of people and buildings were placed into trapezoid formations. In the Southern and Northern Dynasties, figures in murals were organized into triangles to represent perspective. In the Tang Dynasty, perspective was attempted by depicting a distant object small and a near one large; in addition, this period saw the establishment of a mode of perspective depth expression in which objects are shortened as they near the horizon.

研究分野：美術史

キーワード：奥行き表現 山水画 山水之变 壁画 畏獣 石刻画像 山西省

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

一般的に、絵画における奥行き表現は、ヨーロッパ絵画で、特に透視図法の発展に伴って、ルネサンスからバロックの近代において発達したと考えられており、東アジア絵画はそれに較べれば奥行きのない、平面的な表現であると思われるが、それは、日本の絵画とヨーロッパ絵画を比較すれば、ほぼ自明のように思われるが、中国絵画の場合はそうではない。漢代には、遠いモチーフを画面上部に配置し、近いものを下部にするという、上遠下近の素朴な遠近表現があった。それが3世紀以降、後漢～魏晋南北朝に現れる俯瞰的台形構図による遠近表現を経て、唐代には「山水之変」という言葉で表される、地平線に向かって画面内のモチーフが短縮していく、透視図法的遠近法が成立する。8世紀の盛唐期には、こうした画面構成を取る作品として、敦煌莫高窟172窟東壁変相図、正倉院宝物の楓蘇芳螺鈿槽琵琶捍撥絵画《騎象鼓楽図》等があり、画面上部に地平線が設定される、奥行きの深い空間が描出されている。こうした漢代の画面構成や遠近表現については、Doris Croissant「武氏画像のコムポジション」(『漢代画像の研究』所収)、唐代の「山水之変」に関しては米澤嘉圃「「山水の変」と騎象鼓楽図の画風」(『中国山水画研究 山水画論』所収)が詳しいが、その変化の途中である魏晋南北朝時代に、どのように遠近表現、または奥行き表現が展開したかについては、ほとんど研究がない状況であった

2. 研究の目的

本研究は、中国絵画の奥行き表現、特に魏晋南北朝時代の絵画における奥行き表現の展開を、山水画の遠近表現の変遷、人物の群像表現の進化および畏獣の飛来表現等から、明らかにしようとするものである。

漢代の上遠下近の画面構成による素朴な遠近法から、唐代の透視図法的奥行き表現へと、どのように展開していったのかを、中国の出土品を中心に調査、検討し、画面内における人物構成の変化、特に畏獣とよばれる神獣の表現に着目して考察する。そこからヨーロッパにおいて14-16世紀に成立した透視図法に類似する奥行き表現が、3-8世紀の中国においてどのように成立し、展開したかを検証する。こうした検討から、山水画という風景画の一種が早くから発達した中国においては、奥行き表現もヨーロッパに先んじて発達したことを明らかになるであろう。

3. 研究の方法

山水画が発達する以前の漢代～魏晋南北朝期には、奥行き表現を検証可能な山水表現が少ないため、人物表現、特に群像の配置や、人物よりも関連な動きを表現されている畏獣のポーズに着目し、それらの変遷から画面構成の変化をさぐる。そのために、以下の調査を実施した。

- ・2016年3月13日 ポストン美術館 石室、元君墓誌・蓋、五百羅漢
- ・同 3月14-15日 メトロポリタン美術館 彩絵仏像(コートン、6世紀)、再開菩薩像(ベゼクリク石窟;ウイグル、9-10世紀)、スイ(目に佳)陽五老図のうち畢世長像(北宋)等、南北朝の石彫および唐宋の絵画等の調査。これより、南北朝～隋唐、北宋の人物表現を検討した。
- ・2016年9月30日 東京国立博物館 趙孟頫行書蘭亭十三跋冊頁、同楷書玄妙觀重脩三門記調査。これより魏晋南北朝時代の書法を検討した。
- ・同 3月25日 和泉市久保惣記念美術館 北魏棺床・囲屏・墓誌銘、五代《十王図巻》等調査。北魏棺床の畏獣・人物表現を検討した。
- ・同 3月27日 天理大学附属天理参考館 北魏《爾朱紹墓誌蓋》529年、北魏囲屏《風俗図画像石》一対6世紀の調査。北魏石造物の線刻表現を検討。
- ・2017年4月30日～5月1日 東京国立博物館所蔵画像石調査。漢代～魏晋期の人物構成を検討。
- ・2018年2月1日 仏教版画調査(打合せ、武蔵野市立吉祥寺美術館)。仏教版画に見る人物表現を調査検討。
- ・同 2月17-19日 海の見える杜美術館蘇州版画調査。明清時代の風景版画に見る奥行き表現を検討した。
- ・同 2月23-24日 九州国立博物館 魏晋南北朝美術資料調査。魏晋南北朝銘文の書法を検討した。
- ・同 2月26-28日 上海博物館 山西省壁画調査。山西省出土壁画を調査・検討した。
- ・2019年2月16-18日 海の見える杜美術館 蘇州版画調査2回目。明清風景版画の奥行き表現を検討。
- ・同 2月28日-3月4日 洛陽古墓出土品、龍門石窟調査。漢代～魏晋南北朝時代の人物造形、群像表現を調査・検討した。
- ・同 3月9-11日 東京国立博物館 Comite International d'Histoire de l'art 略称 CIHA 国際美術史学会参加。東アジアの人物造形に関する情報を収集した。

4. 研究成果

上記調査および検討の結果、以下の所見を得た。

- 1)北齊王朝の造形表現、特にパルメット唐草文に類する装飾的表現や畏獣の表現およびその

命名に関して確認することができた。

2) 北朝の畏獣の表現、特に飛来する畏獣の三角形構図、そして顧愷之《女史箴図》に見られる人物群像の三角形構図は、透視図法的奥行き表現の原形となった可能性がある。

3) 漢代の上遠下近遠近法は、後漢～魏晉期における人物群や建物の台形構成を経て、東晋～南北朝時代には人物群の三角形構成で遠近を表すようになり、遠くのを小さく近くのを大きく描く遠小近大の遠近法と併用されて、地平線に向かって事物が短縮していく透視図法的奥行き表現が成立した、と考えることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

01 河野道房、盛懋《陶淵明栗里図》、美術フォーラム 21、査読無し、38 号、2018 年、9-14 ページ

02 河野道房、「山水之変」 中国絵画における奥行き表現の古典様式、人文学、査読無し、198 号、2016 年、73-86 ページ。

03 河野道房、北齊徐顕秀墓の造形的特徴、人文学、査読無し、197 号、2016 年、1-12 ページ。

04 河野道房、謝時臣筆《春景山水画》研究、美術フォーラム 21、査読無し、32 号、2015 年、14 - 19 ページ。

05 河野道房、模写から見える東アジア絵画史、美術フォーラム 21、査読無し、31 号、2015 年 41-48 ページ

〔学会発表〕(計 1 件)

01 河野道房、“Regarding the Qi'ao xian zong tu Handscroll Painted by Xie Shichen in the Collection of the Museum Rietberg, Zürich”、第 2 回京都スイスシンポジウム 2016 Session5、2016 年

〔図書〕(計 1 件)

01 河野道房、中央公論美術出版、中国山水画史研究 奥行き表現を中心に、2018 年、416 ページ。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

01 <http://ea-art-history.jp/>

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：倪 晋秀

ローマ字氏名：NI JINXIU

研究協力者氏名：汪 文磊

ローマ字氏名：WANG WENLEI

研究協力者氏名：島村 桂子

ローマ字氏名：SHIMAMURA KEIKO

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。